



く せ ん 薫 泉

学校の目標
社会の変化に自ら対応でき、豊かな心をもち、表現力豊かな国際人を目指し、次のような子どもを育成する。
・よく考え、進んで学習する子ども
・いつも元気で、じょうぶな子ども
・こころ豊かで、やさしい子ども

PISA型読解力 世界第三位は大きな成果

校長 井上光広

十二月六日の報道で明らかになったOECD（経済協力開発機構）の学習到達度調査「PISA」の読解力で日本が世界第十五位から第三位に上昇したことは、多くの方がご存じだと思います。この受験対象は抽出された日本の高校一年生六千人となっていますから、全ての高一生が受けているわけではありません。しかし、どの国も同様に調査をしているわけなので、信頼のおけるデータだと思います。

「PISA型読解力」とは次のような思考過程をたどります。

情報収集（情報を正しく取り出す）
解釈（情報の意味を理解したり、推論したりする）
熟考（情報を通して様々に深く考える）
評価（自分にとつての、その情報の意味を深める）
発信（人に分かるように論ずる）

私自身はここの十五年間ほど、心の底ではこの思考の流れを意識して教員を指導し、子どもたちの思考力を鍛えることを目標として仕事をしてきました。そのためにマインドマップ®というPISA型読解力の思考を急激に向上させるツールや、TEFCAサイクルの導入に努力してきました。二〇〇八年には、「日本のPISA型読解力を世界一にする」というミッションを掲げ、志を共にする方々と協力して、講師として日本中を巡ったこともありました。今回、この読解力が過去最高位に上昇したことは感慨深いものがあります。

課題も多くあります。各新聞紙の記事を抜粋してみます。

「日本の子どもは自ら学ぶ意欲が低い」「自律的な学習への自信の指標は加盟国中最下位だった」「自己効力感（自信）が参加八十一の国と地域で最低だった」「自分で考える力を伸ばすには、読書体験を重ね、自分の世界を広げることが重要だ」「探究型学習でICTを使用する頻度は最下位」「過酷な労働環境でも努力する教員の使命感だけに頼るのではなく、早急な働き方改革を進める必要がある」「実社会の問題と自身の学びを結びつける力が弱い」

こうした課題の解決に向けて、十一月二十七日に本校が研究発表会を行った教科「おわたの未来づくり」の学習が力を発揮するのです。この学習を通して、児童は次の姿で学習効果を証明してくれました。

- ① 常に他者意識をもち、誰かのために学ぶ姿
- ② 探究に次ぐ探究を重ねる学びの中で、自ら学ぶ意欲の高さを示してくれたこと
- ③ 多くの参観者が見つめる中でも自信と誇りをもって学習を進めたこと
- ④ 地域の課題に正対し、自身の学びを社会に生かそうとする意欲
- ⑤ 教員からの指示がなくても児童同士で学び合い続ける姿

本校はこれからも、正解なき新時代を生き抜くための児童の底力を高めてまいります。

【お知らせ】

- ◎ 大田区小学校駅伝大会（十二月十六日）の結果
矢口小学校 三十三分三十九秒
- ◎ 一月十八日（金） 東京都教育委員会「笑顔と学びの体験プロジェクト」の伝統文化体験として日光猿軍団による「猿回し」を、全校児童で楽しく鑑賞する予定です。非公開となります。
- ◎ 冬季休業日中に大谷翔平選手から贈呈されるグループが届きます。楽しみにしてください。

一月の生活目標 礼儀正しくしよう

生活指導部

「礼儀」は、社会生活を営む中で、大切にすべきものの一つです。『広辞苑』では、「敬意をあらわす作法」とあり、相手への「尊敬」の気持ちを込めた行動が礼儀とされています。

学校生活で、相手への「尊敬」を表す場面は多くあります。毎日の挨拶や会話の中での言葉遣い、相手にお礼を伝えることやきちんとした姿勢で目を見て人の話を聞くことなどが挙げられます。それらをただこなすだけではなく、尊敬の「心」を込めて行うことが学校生活に必要な礼儀です。

堅苦しいルールや規律が薄れつつある現代ですが、礼儀は社会生活の中で重要なことはこれからも変わらないと思います。「心」を込めた「尊敬」を表す礼儀について、今一度考え、取り組んでほしいと思います。

子どもたちの健康について

養護教諭

矢口小学校の保健室は、様々な理由で、多くの子どもたちが来室します。その中でも、別室登校や、頻回来室など、多様化する子どもたちの来室動機が心の健康に関わっていることも少なくありません。今年度は長かったコロナ生活がようやく緩和されました。保健室でも、基本的な感染症対策を見直したり、2学期の身体計測前には、ミニ保健指導を復活させたりなど、子ども一人一人と向き合う時間が増えたと実感しています。

来室背景を受け入れ、一緒に考えることで、不安や悩みを抱える子どもたちが少しでも前向きな気持ちで教室に戻れるように、また、元気に家庭へ帰れるように、誰ひとり取り残さない保健室として存在する必要があると考えます。

そのために、養護教諭として、保健室は子どもたちのSOSに気が付きやすい場であることを自覚し、いつでも・誰でも・どんなときも、安心して駆け込める保健室を目指して、これからも子どもたちの健康の保持増進に努めてまいります。